

TOPICS

- ① 高等教育研究開発センタープロジェクト活動報告
「アセスメントプランの再構築に関する事項」
- ② 「創造思考法」の開講に向けた準備に関する検討について
- ③ 2024 年度開講の「コミュニケーション英語Ⅳ（実践）A（海外研修）」の考察
- ④ イントロダクションの内容と政策学概論での授業工夫
- ⑤ 地域創生学部における地域実習の実践例
- ⑥ 学生とともに成長し、変化しながら拡大する
プログラミングスクール「ShukuLab」

① 高等教育研究開発センタープロジェクト活動報告 「アセスメントプランの再構築に関する事項」

杉原亨

高等教育研究開発センタープロジェクト活動報告

2024 年度の高等教育研究開発センターのプロジェクト活動の中で、アセスメントプランの再構築に関する事項と、「創造思考法」の開講に向けた準備に関する検討、について報告いたします。

(1) アセスメントプランの再構築に関する事項

1. これまでの経緯

アセスメントプランについて、教学マネジメント指針では、「学生の学修成果の評価(アセスメント)について、その目的、学位プログラム共通の考え方や尺度、達成すべき質的水準及び具体的実施方法などについて定めた学内の方針。」と定義されています。ここから、「“学生の学修成果”を、誰が、いつ、どのように“評価(アセスメント)”するのかを定めた、学内の方針」と考えることができます。

また、アセスメントプランを実行するにあたり、教学マネジメント指針では「大学全体」「学位プログラム」「授業科目」という 3 つのレベルが設定されています。さらに、学修者本位の教育という点では、評価者は「教育を行う教員」の視点だけではなく、「学修者とし

ての学生」の視点、そして、卒業した学生を受け入れる「社会」の視点で評価する必要があります。アセスメントプランは、様々な視点で評価ができるよう、プランニングする必要があります。

このアセスメントプランの考え方に基づき、2023 年度から、アセスメントプランの構築に関するプロジェクトが、高等教育研究開発センターで開始されました。プロジェクトメンバーにより、本学のアセスメント活動に関する全体的な現状整理、学部・学科で実施しているアセスメントの整理、各科目で採用されているアセスメント方法のチェック、他大学に関する事例調査などを踏まえて、23 年度の大きな成果として、淑徳大学アセスメントプラン（案）、いわゆるアセスメントマップを完成させました。

具体的には本学のアセスメントプランの項目を表にしたもので、縦軸に「大学全体」「学位プログラム別（学科）」「科目別」、横軸に「AP（アドミッション・ポリシーを満たす人材かの検証）」「CP（カリキュラム・ポリシーに基づき、学修が進められているかの検証）」「DP（ディプロマ・ポリシーを満たす人材になったかの検証）」を定め、3×3 で 9 のマトリックスで、該当する

アセスメントをそれぞれのボックスに当てはめました。
加えて、各アセスメントについての説明をしています。
これらを活動報告として取りまとめました。

2. 2024 年度の取り組み

この 2023 年度の成果を基に、2024 年度のプロジェクトメンバーで、アセスメントの再構築について発展させていくべく取り組んできました。

①アセスメントプラン教職員向け定義の作成

これまでの活動を踏まえて、淑徳大学アセスメントプラン（教職員向け）の定義に関する文書を作成しました。

②淑徳大学アセスメントプラン（案）のブラッシュアップ

2023 年度に作成されたアセスメントマップを、プロジェクトメンバーで再検討をし、精緻化されたアセスメントマップを作成しました。具体的にはアセスメントの位置づけや 3 ポリシーとの対応の再確認を行いました。

③アセスメントプランの詳細版の作成

各アセスメントで、実施時期や頻度、対象学年、主な質問項目・内容等、手法、実施責任部署、結果の活用方法を整理した一覧表を作成しました。

④Tableau を用いたディプロマサブリメントの開発

アセスメントの 1 つとして、ディプロマサブリメント（学生が自身の学修成果の確認や、就職活動時や卒業時の企業等への提示を目的としたもの）を Tableau にて自動で作成する仕組みを検討しています。

⑤コミュニティ政策学部での検証

精緻化した改訂版アセスメントプラン（案）に沿って、コミュニティ政策学部で検証を実施しました。

具体的には、AP を満たす人材かの検証として、A)入学試験、B)新入生調査、C)入学前教育実施状況、D)英語等プレイズメントテスト、E)学士カールブリック、に関して調査を行いました。

また、CP に基づき学修が進められているかについての検証として、A)GPA 分布、B)休学・退学率、C)成績不振学生の調査、D)学修行動等調査、E)学生参画スタッフ活動、F)単位修得状況、G)学修ポートフォリオ、H)学士カールブリック、I)コモンルブリック、J)ボランティア、インターンシップ参加状況、K)成績評価、L)授業アンケート、M)英語アチーブメントテスト、N)シラバスの第三者確認、について確認しました。

最後に、DP を満たす人材になったかについての検証として、A)GPA 分布、B)休学・退学率、C)成績不振学生の調査、D)内定・就職率、進学率調査、E)国家試験等合格状況、F)学修行動等調査、G)卒業時調査、H)卒業後調査、I)卒業生の就職先等への意見聴取、J)外部有識者懇談会、K)卒業論文/卒業研究（ルブリック）、L)研究成果報告会、M)学修ポートフォリオ、N)学士カールブリック、O)コモンルブリック、P)ボランティア、インターンシップ参加状況、Q)ディプロマサブリメント、について分析を行いました。これらの結果を踏まえて、総合的なレポートを作成中です。

3. 今後の展開

コミュニティ政策学部の検証を踏まえて、2025 年度は全学で改訂版アセスメントプランを実施し、検証を行っていきます。また、Tableau を用いたディプロマサブリメントの開発を進めて、活用を含めて検討を行っていきます。

参考文献

文部科学省「教学マネジメント指針」（令和 2 年 1 月 22 日大学分科会）

「アセスメントプランの再構築に関する事項」プロジェクトメンバー（敬称略）

杉原亨、玉井颯一、佐佐木智絵、高木亨、田中元基、中西規之、吉田康平、学長室

（高等教育研究開発センター 准教授 杉原亨）

② 「創造思考法」の開講に向けた準備に関する検討について 日野勝吾、杉原亨、荒木俊博

創造思考法は、2026年度後学期のS-BASIC科目として開講予定の1単位15回授業の必修科目です。本科目は、全学共通の基礎教育科目群であるS-BASIC科目の集大成として位置付けられ、いわゆるキャップストーン科目に相当します。担当教員は、各学科の専任教員を想定しています。専門のゼミナールや卒業研究が専門科目の総括的評価に該当するのに対し、本科目は汎用的能力を育成する全学共通基礎教育科目（S-BASIC）の総括的評価としての役割を担います。

2024年度は、国内外の文献調査や大学教育学会などの学会、学外セミナーを通じて情報収集を行いました。その結果、国内事例よりもアメリカのキャップストーン科目の事例のほうが参考にすべき点が多いことが判明しました。

なお、独立行政法人 大学改革支援・学位授与機構によると、キャップストーン・プログラムは「学習者がそれまでの学習で修得した理論的知識を応用し、実際の課題の解決策を提示するプロジェクトにグループまたは個人で取り組み、その実践プロセスが評価される教育プログラム。一般に最終学年に配置され、学習の到達点を示す。」と定義されています。この考え方を基に、創造思考法の授業設計を精緻化しています。

調査終了後、コアシラバスの作成に着手し、第一版を完成させました。授業の到達目標として、次のように設定しました。

①自らが立てた課題の解決に向けた手法の検討と選択を行うことができる。

②資料収集や分析報告、意見交換を通じて自己の考えを展開できる

また、授業の概要は以下の通りです。

「これまでに獲得した知識、技能、態度などを総合的に活用し、自らが立てた新たな課題にそれらを適用し、課題を解決する総合的な実践能力を養成することを目的とする。各自の学習課題に即した学習計画を設定し、資料収集や分析、報告、意見交換を繰り返しながら自己の考えを展開するとともに、課題学習による報告書等の作成を通して、卒業後も自律・自立して学習できる態度を身に付ける。」

授業計画については、さらなる精緻化が必要ですが、学び方の振り返り、課題設定、学習計画策定、資料・データ収集、分析、グループワーク、プレゼンテーションなどの要素を組み込む予定です。

2025年度には、高等教育研究開発センターのメンバーによるコアシラバスの検討を行い、その結果を踏まえて、2025年6月に一部の学生を対象としたパイロット授業を実施する予定です。この授業の実施前に共通教材や授業計画を準備し、授業の分野に応じたパッケージを作成します。また授業の検証結果を基に、2026年度の正式開講に向けたさらなる修正を行います。

今後は、センター内だけでなく学内の多くの教職員と協働し、様々な意見を反映させながら本学独自のキャップストーン科目を構築していく予定です。

参考文献

独立行政法人 大学改革支援・学位授与機構「高等教育に関する質保証関係用語集」

（高等教育研究開発センター長・コミュニティ政策学部
コミュニティ政策学科 教授 日野勝吾、高等教育研究開発センター 准教授 杉原亨、学長室課長 荒木俊博）

③2024 年度開講の「コミュニケーション英語Ⅳ（実践）A（海外研修）」の考察

畑江美佳

1. 「コミュニケーション英語Ⅳ（実践）」の位置づけ

全学共通の基礎教育科目（S-BASIC）に位置づけられる「コミュニケーション英語Ⅰ～Ⅳ」は、2023 年度 1 年前学期に「コミュニケーション英語Ⅰ（基礎）」、同年度 1 年後学期に「コミュニケーション英語Ⅱ（応用）」、2024 年度の 2 年前学期に「コミュニケーション英語Ⅲ（実践）」の運用を開始した（地域創生学部はクォーター制で実施）。これらの必修科目は、入学時のプレイスメントテストによりクラスを習熟度別に 3 レベルに分け、1 クラス 25 名前後の少人数で行われている。さらに、2024 年度 2 年後学期に、選択科目として「コミュニケーション英語Ⅳ（実践）」を開講することとなった。

淑徳大学の現行カリキュラムでは、全学向けの英語科目は 2 年後学期の「コミュニケーション英語Ⅳ（実践）」以降には存在しない。そのため、本科目では、できる限り学生の将来に役立つ実用的な授業内容を展開することを目指した。2023 年度の検討段階では、「海外研修のための英語力と異文化理解力」「就職のためのビジネス英語」「英会話のスキルアップ」「専門職に必要な語彙力や表現力」の修得を目的として、「海外研修」「ビジネス英語」「英会話」「専門英語」の開講を検討していた。しかし、2024 年度は、全学に共通してニーズが高いと考えられる「海外研修」と「ビジネス英語」の 2 クラスに絞り、4 キャンパス同時に実施できるよう遠隔授業（同期型）で開講することとなった。

本稿では、このうち 2024 年度後学期に実施された「海外研修」について考察する。

■S-BASIC「コミュニケーション英語Ⅰ～Ⅳ

| 1年前学期 | 1年後学期 | ... | 2年前学期 | 2年後学期 |
|----------------------|----------------------|-----|----------------------|----------------------|
| コミュニケーション英語Ⅰ (基礎) | コミュニケーション英語Ⅱ (応用) | ... | コミュニケーション英語Ⅲ (実践) | コミュニケーション英語Ⅳ (実践) |

2. 「コミュニケーション英語Ⅳ（実践）A（海外研修）」の検討

「コミュニケーション英語Ⅳ（実践）A（海外研修）」は、国際交流センターが主催するトンプソン・リバーズ大学での 3 週間の「夏期カナダ英語・異文化研修」を対象とし、出発前の事前学習（第 1～3 回）、現地研修（第 4～13 回）、帰国後の事後学習（第 14・15 回）の計 15 回の授業を設定した。カナダ研修の一部を 10 回分の講義と換算し、各授業の事前事後学習の時間にも充てた。

成績評価については、指定された提出物（15 点）・プレゼンテーションの評価（15 点）、現地での成績（15 点）およびプログラム修了証の提出をもって、1 単位を付与することとした。ただし、同様の内容で実施している「春期オーストラリア英語・異文化研修」は、3 月下旬まで現地研修が行われるため、年度内の修了および成績評価が困難であることから、今回は見送りとなり、「夏期カナダ英語・異文化研修」のみを対象とすることとなった。

授業形態は、全学同時に実施できるよう「遠隔授業（同期型）」とし、3 回の事前学習では、海外で役立つ英語表現の口頭練習および海外での生活や文化についての講義を行った。また、「カナダ英語・異文化研修で何を学びたいか？ そのために現地で何をするか？」という問いを投げかけ、渡航前に各自が研究テーマを設定するよう促した。事前に具体的な目的を持たせることで、研修中はその観点から物事を観察し、必要に応じてインタビューや写真・資料を収集するよう指導した。そして、帰国後の 2 回の事後学習では、各々のテーマに基づいて

資料をまとめ、英語でプレゼンテーションを行った。この一連のプロセスを通じて、海外研修にアカデミックな要素を取り入れ、一人ひとりの深い学びの実現を目指した。

3. 目標・形態・授業内容

S-BASIC では共通シラバスを採用しているため、シラバスとは別に「A 海外研修」に特化した「到達目標」を以下のように策定した。

1. 研修前に留学のための英会話を学び、現地でのコミュニケーションが円滑にできるようにする。
2. 現地において、語学研修及び異文化体験を通して自己の英語力及び異文化コミュニケーション能力を高める。
3. 研修後、現地で学んだことについて英語でプレゼンテーションすることができる。

シラバスの「授業形態」については以下のように設定した。尚、遠隔授業の方法に関しては、「淑徳大学 遠隔授業のガイドライン（2024年11月6日公表）」に従った。

開講曜日時限は履修登録後 S-Navi を通して履修者と教員間で調整する。第1～3回目、第14～15回目は、全学合同で遠隔授業（同期型）とする。それ以外の授業時数及び事前事後学習の必要時間数は、現地でのプログラムにより換算する。

また、全15回の授業内容については、研修前、研修中、研修後の3段階で構成し、以下のように作成した。第15回目にはプレゼンテーションを実施し、遠隔授業では難しいアクティブ・ラーニングの要素を取り入れるため、学生同士が意見交換を行う時間を設けた。

第1回 オンライン 海外で役立つ会話・生活①（空港・機内・税関）

第2回 オンライン 海外で役立つ会話・生活②（買い物・観光・レストラン）

第3回 オンライン 海外で役立つ会話・生活③（ホームステイ）

プレゼンテーションのテーマを決める

第4回～第13回 トンプソン・リバーズ大学での研修

第14回 オンライン プレゼンテーションの準備（プレゼンで使用する表現の練習、原稿作り）

第15回 オンライン プレゼンテーション（クラス内で発表・意見交換）

4. 授業の実際

2024年度の履修者は5名であったが、そのうち1名は体調不良により直前に研修をキャンセルしたため、実質的な履修者は4名となった。第1回目～第3回目の授業では、「空港、機内、税関、買い物、観光、レストラン、ホームステイ」といったシチュエーション別に海外（留学）で役立つ会話集を作成し、発話練習を行った。さらに、海外の生活や文化に関する豆知識も授業に盛り込んだ。第3回目の授業では、帰国後のプレゼンテーションのテーマを考えさせ、事前に予習を行わせた。履修生一名の具体例を以下に示す。

課題 カナダ英語・異文化研修であなたは何を学びたいですか？そのために現地で何をしますか？

学籍番号（ ○○○○ ） 氏名（ △△△△△△ ）

【日本語】

私は、今回のカナダ研修で日本とカナダの文化の違いについて学びたいと考えています。そのために現地の家族との同居を通じて、日常生活を体験することやスーパーや市場での買い物を通じて、現地の食文化を学んだり、現地の人とも関わる機会があれば、積極的に関わる機会を作りたいと思います。

【English】

During my study program in Canada, I want to learn about the cultural differences between Japan and Canada. To do this, I will experience daily life by living with local families. I will learn about the local food culture by shopping at supermarkets and markets. I want to engage with local people if there are opportunities to interact with them.

Hello, everyone.

My name is △△△△△△ from Shukutoku University

Today, I'm here to talk about Canadian Culture and Canadian Food Culture.

I have researched Canadian food culture and how Canadian culture differs from that of Japan. First of all, these pictures are the dishes that my homestay family cooked for me. Pasta and bread were the most common staple foods in Canada. On the next slide, look at the photo on the upper right. This dish is called poutine and is known as a traditional Canadian dish.

Next, I would like to talk about supermarkets. Comparing Canadian supermarkets with Japanese supermarkets, Canadian supermarkets are very large and sell a wide variety of products. I was impressed that the items sold in Canadian supermarkets were larger than those in Japan.

(以下割愛)

カナダの英語・異文化研修を終えて帰国後、第14回目の授業では、プレゼンテーションのスク립トをまとめる作業を行った。帰国後、学生には「英語のプレゼンで使用される表現集」を配布し、参考資料として活用させた。学生はパワーポイント資料を作成し、教員は事前に提出されたスク립トをチェックして修正点をコメント付きで返却した。学生が自分の言葉で話すことを重視し、修正は最小限にとどめた。以下にプレゼンテーションのスク립ト例を示す。

プレゼンテーション時には、発表者以外の学生にも発表終了後に感想や質問を求めた。また、遠隔授業であっても、スク립トを見ずに顔を上げてはっきり話すことや、“This is ～.”と言う際にその部分をマウスで指しながら説明することなどに留意させた。以下に、プレゼンテーションのスライド例を示す。



5. 授業アンケート結果と次年度に向けた課題

「コミュニケーション英語Ⅳ（実践）A（海外研修）」の授業アンケートの結果（回答者2名）では、ほとんどの質問において「4（大いにそう思う）」の評価が得られた。「Ⅰ-5 あなたが事前・事後学習に取り組んだ時間は、授業1回（90分）につき、平均してどの程度ですか」という質問には、3～4時間未満の学生と1～2時間未満の学生に分かれた。トンプソン・リバーズ大学での授業では、英語力の個人差もあり、課題に取り組む時間に差が生じたと推測される。

また、「Ⅱ-6 この授業の内容は、あなたにとって難しかったですか」という問いには「大いにそう思う」との回答があった。一方で、「Ⅲ-1 あなたは、シラバスに記載された到達目標を達成できましたか」および「Ⅲ-

3 あなたは、この授業を受講して、満足していますか」の問いにも「大いにそう思う」との回答が得られた。

「難しかった」との回答には、トンプソン・リバーズ大学での研修内容も含まれていると考えられる。しかし、「到達目標を達成できた」「満足している」という回答が得られたことから、学生にとって挑戦的でありながらも達成感のある研修であったことがうかがえる。帰国後の学生の様子は明らかに以前とは異なり、自己肯定感を得て自信に満ち溢れていることが印象的であった。

自由記述では、「事前授業では役立つフレーズがあり助かった。また、発表はカナダでの思い出をまとめる良い機会となってよかった。」という意見が寄せられた。事前3回、事後2回の授業も、学生にとって一定の有益性があったと考えられる。

しかしながら、本アンケートの回答者が2名と少数であること、さらに現地研修と研修前後の授業について分けて調査していないため、分析に曖昧な部分がある点は否めない。次年度に向けては、独自のアンケートを作成し、より詳細な検証を行いたい。

また、カナダでの研修中に「この科目をこれからでも取ることができますか？」という問い合わせのメールが数件寄せられた。「コミュニケーション英語Ⅳ（実践）A（海外研修）」は今回が初開講だったため、次年度に向けて本科目の周知が課題となる。1年後学期の「コミュニケーション英語Ⅱ（応用）」の授業内での説明や、S-Naviでの情報配信を行い、より多くの学生に認知されるよう努めていきたい。そして、本科目が国際交流センター主催の海外英語・異文化研修の参加者増に寄与できれば幸いである。

さらに、今年度見送られた「春期オーストラリア英語・異文化研修」についても、「夏期カナダ英語・異文化研修」で単位が付与されている学生との教育格差を是正する観点から、引き続き開講に向けた取り組みを継続していきたい。

（高等教育研究開発センター 教授 畑江美佳）

④イントロダクションの内容と政策学概論での授業工夫

竹本信介

今年度よりコミュニティ政策学部に着任しました竹本信介と申します。専攻は行政学で、公共政策に関する科目を担当しております。今回の寄稿では、

1. 私が全担当科目で実施しているイントロダクションの内容
2. 主に1年生の受講を想定している政策学概論での授業工夫

について紹介します。

イントロダクションの内容

私が担当する授業は、行政学に加えて、地方自治行政論、政策過程論、公共管理論などの専門科目群、そして1年生向けの政策学概論です。すべての授業初回では、共通のイントロダクションを行い、「複眼的思考」というキーワードを軸に進めています。

「複眼的思考」とは、「複数の視点を自由に行き来することで、一つの視点にとらわれない相対化の思考法」(荻谷剛彦『知的複眼思考法』講談社, 2002年, p.27)と説明できます。この思考法を体感的に理解してもらうため、授業の冒頭では「だまし絵」を活用します。例えば、エドガー・ルビンの「ルビンの壺」を提示し、受講者にどのように見えたかを問いかけ、視点の違いを実感してもらいます。こうした手法(可視化)を通じて、公共政策を考える上で「複眼的思考」が欠かせないことを直感的に伝えています。

また、「同じ情報であっても視点を換えることで見え方が変わる」という点を強調し、政策課題に対する多様な見方を持つことの重要性を示します。例えば、少子高齢化問題を取り上げる際には、社会学的視点、政策学的視点、経済学的視点、法律学的視点など、異なる角度から考察することで、より深い理解が得られることを説明します。

さらに、イントロダクションの一環として、毎回の授業で公共政策に関するニュースを取り上げ、その意義を考察しています。現代のメディア環境ではフィルター・バブルやエコ・チェンバーの影響が指摘されており、公共政策のニュースを多角的に捉える力を養うことが、本学の建学精神「利他共生」や民主主義を支える熟議と深く結びついていることを強調しています。

政策学概論での授業工夫

この科目では、高校までの「唯一の正解を求める学習」から脱却し、大学における専門的な学びへの移行を促すことを目指しています。今年度は特に以下の三つのアプローチを試みました。

1. 独自性のあるテキストの採用

政策学概論は、政策学の全体像を広く見渡す導入科目であり、「複眼的思考」の確立が鍵となります。そのため、松田憲忠・三田妃路佳編『対立軸でみる公共政策入門』(法律文化社, 2020年)をテキストに採用しました。

このテキストでは、政策領域を「対立軸」の視点から分析し、「答えは一つではない」「合意形成をあきらめない」というメッセージを強調しています。これらの視点は、「多様性」と「共存」という政策学の基礎概念と響き合い、政策を多角的に捉える力の育成につながります。

加えて、テキスト内で取り上げられる具体的な事例について、授業では最新のデータや政策動向を交えて議論を展開しました。例えば、エネルギー政策に関する章では、日本における再生可能エネルギーの導入状況や、欧州の政策との比較を通じて、受講者がより実感を持って学べるよう工夫しました。

2. 復習用レジユメの活用

毎回の授業冒頭では、前回の内容を振り返り、記憶定着を促すために空所補充形式のレジユメを配布しました。この手法により、受講者が授業のポイントを再確認しながら、効果的に学習を進められるよう工夫しました。

さらに、授業の後半では、この復習用レジユメをもとに受講者同士でディスカッションを行う時間を設け、単なる知識の確認にとどまらず、意見を交換する場としました。こうした取り組みによって、理解の深化や新たな視点の発見が促されました。

3. 読書マップの作成

授業の最終回では、受講者に教科書の分野から四つを選び、それぞれに関連する参考文献を挙げてもらいました。そのうえで、それら四つの分野と文献を結びつける「読書マップ」を作成する課題を課しました。この作業を通じて、受講者はコロケーションや連関を意識しながら学びを深めることができます。

提出された読書マップを確認したところ、こちらの予想を超える探究心の高さが表れており、受講者の創造的な学びを引き出す成果が得られました。例えば、環境政策と福祉政策を結びつけ、持続可能な社会保障のあり方を考察するなど、各自の関心に基づいた独自の視点が表示されました。

授業設計を通じた学びの考察

今回の取り組みを通じて、改めて認知科学の知見が教育において有効であることを実感しました(鈴木宏明『わたしたちはどう学んでいるのか』ちくまプリマー新書、2022年)。生田久美子が伝統芸能の習得プロセスについて示した「模倣・繰り返し・習熟」の概念を参考にしながら、教育の実効性を高める手法を模索する重要性を再確認しています(生田久美子『わざ』から知る(コレクション認知科学)東京大学出版会、2007年)。

私は「実質合理性」と「形式合理性」のせめぎ合いの中で、教育・研究方法の改善を続けることが、教育者・

研究者としての自己改革につながると考えています。今後もこの視点を持ちつつ、来年度以降は受講者からのフィードバックをさらに分析し、授業の柔軟性を高める工夫を取り入れながら、より良い授業設計を追求していく所存です。



【出典】筆者による撮影

(コミュニティ政策学部コミュニティ政策学科 助教 竹本信介)

⑤地域創生学部における地域実習の実践例 高木亨

はじめに

2023年度に新設された地域創生学部は、カリキュラムの約3割が地域実習（フィールドワーク）科目であることを売りにしている。残念ながら大学のシステムが学部理念と一致しておらず、地域実習を担う教員はその都度苦勞を強いられるなど、産みの苦しみを味わっている。とはいえ、学生には教員が持てる力を惜しみなく注ぎ、地域を理解できる能力を持った社会人を育てるべく日々奮闘している。今回は筆者が担当する1年生～2年生の地域実習科目である「地域理解実習Ⅱ～Ⅵ」を中心に、地域実習での取り組みを紹介したい。

地域創生学部は埼玉キャンパスで唯一クォーター制を導入している。しかし、大学の教務システムは Semester 制であり、S-Navi などの学習支援システムが対応していない。このため、学年歴や時間割の表示などで学生に不便をかけている。また、学外での地域実習に既存の大学システムが追いついておらず、実習手配や学生への実習費補助、車使用等での課題が山積している。そして、地域実習の経験豊富な教員が想定している実習の姿と現行の大学システムとのすりあわせが不十分である。崇高な理想を持って設立された学部である（と聞いている）ので、地域実習の運用に際しても既存の大学システムの上で考えるのではなく、新しい学部がより魅力的に運営できるよう仕組みを改める勇気を持ってもらいたい。また、実習を魅力あるものにするため、現場を担当する教員の意見を取り入れることが重要である。

地域理解実習について

地域創生学部の地域実習は以下のように構成される。1年生～2年生前期（1年生第1クォーター（1Qとす）から2年生の2Qまで）に実施される「地域理解実習Ⅰ～Ⅵ（各2単位）」を皮切りに、2年後期後半（4Q）の「地域調査法演習（2単位）」と「地域資源活

用演習（2単位）」。3年生前期前半（1Q）の「地域調査法実習（4単位）」と「地域資源活用実習（4単位）」、3年生前期後半（2Q）の「地域創生実習Ⅰ（4単位）」、3年生後期（3・4Q）の「地域創生実習Ⅱ（8単位）」「地域創生実習Ⅲ（8単位）」と実習関係が目白押しとなっている。科目だけでなくその単位数の膨大さに、運用面でかなり苦慮している。現在、2学年のためなんとか回っている状況であるが、今後学年が増えるにつれ、現有スタッフ数で対応可能なか不安な状況にある。地域実習の現場を知らない方々が考えることは何をもたらすのか、無謀ともいえる実験に挑んでいる心境を察していただきたい。

このような状況ではあるが、フィールドワークを愛する教員（つまりフィールドワーカー）としては、多様な地域とそこで活躍するアクターと出会えるのは楽しみであり、実習担当者としてのモチベーションは高まる。そこで2年目を迎えた「地域理解実習（以下、理実）」を中心に筆者の実習の取り組みを紹介する。

理実とは1年生が初めて地域にふれる導入科目である。実習の「お作法」やデータのとりまとめ、発表のやり方などフィールドワークに必要な基礎的なものを学ぶ重要な実習である。2Q以降は4地域に分かれ、各地域2名程度の教員が担当し、1年以上にわたり実習の企画・運営、学生指導をおこなっている。

こうした実習体制に対し事務方からは「引率者でよい」「手をかけすぎ」といった発言がある。事務方の言うように「引率者」のみに徹すれば教員の負担は軽減する。それであれば、学部に設置されている地域創生教育研究センター（以下、センター）が実習の企画立案・現地とのやりとり・当日の行程などを担わなければならない。しかし、現状センターには専任職員はおらず、当然そのような業務をこなせる人材は配置されていない。事

務方の発言として責任を持って対応していただきたいが、現状はそのようになっていないことを指摘しておく。

各教員は、地域創生を担う人材を社会に輩出するため、多様な地域の姿を学生に感じてもらえるよう、専門性を活かし工夫を凝らした実習に挑んでいる。また、座学ではわからない、フィールドに出たからこそわかる学生の能力もあり、能力を発揮した学生の姿が見られるのもフィールドワークの醍醐味である。

理実Ⅰ（1Q）は最も導入的な実習である。2024年度は千葉キャンパス周辺をバスで巡っている。理実Ⅱ以降は前述の通り、4つの実習地（埼玉県三芳町、富士見市、八潮市、茨城県笠間市）に分かれ、概ね各クォーター2回の現地実習をおこなっている（理実Ⅵはまとめ作業のため学内実習）。理実Ⅱ以降、実習地との付き合いは1年以上（1年2Q～2年2Q）におよぶ。学生は現行の地域実習の中で最も長い期間、同じ地域とかわかることになる。

八潮市での理解実習

筆者は、2023年度は石田教授と、2024年度は東海林助教と埼玉県八潮市を担当している。実習地は着任以前に協定等の関係で決まっていたため、担当教員はまさに「引率者」的に割り振られた。また、いわゆる「地域課題」が山積しているようなフィールドではないため学部を目指すところと乖離している感は否めなかった。しかし、フィールドワーカーとしてはそれでは面白くない。学生に対して八潮市の魅力を語るができるよう、1年目は学生と一緒に地域魅力を吸収することに努めた。その甲斐あって、私自身八潮市の魅力や地域課題を一通り語れるようになった。

実習内容は、理実Ⅱで八潮市の概要・行政施策（総合計画など）について学ぶ。理実Ⅲでは、八潮市の文化（歴史的なもの、文化財、河川（水）とのかかわり、「ヤシオスタン」をはじめとする多文化共生など）、理実Ⅳでは、八潮市の産業（小松菜を代表とする都市近郊

農業および金属加工をはじめとする工業）に注目する。2年生では、理実Ⅴで地域資源をテーマに1年生の学びを応用するような展開をおこない、最後理実Ⅵで最終報告会（市長報告会）、報告書の作成という流れである。八潮市役所がカウンターパートナーとなり実習担当職員が配置されている。このため、実習の段取りや市の施設利用はスムーズにおこなわれている。

初年度は、市担当職員の主導で市が持つ既存のプログラムを応用する形ではじまった。市職員による講義や市立資料館の見学、巡検実施、市の提携先である工場見学などをおこなった。2年目の今年度はそれを応用しながら、教員側が主体となり八潮市の魅力を学生に伝えられるようなプログラムに修正した。例えば、中川と綾瀬川が流れる八潮市は水にまつわる苦労も多く、そうした実情が理解できる巡検プログラムを資料館の既存コースを利用しながら再構築してもらった。また、八潮市は金属加工・機械工業が主要業種のため、それに近い工場を探してもらい、普段学生が見ることのないものづくりの現場見学をおこなった。さらに、農業の実習では収穫体験のほか、30代の若手農家の方と学生とのディスカッションの機会を設けるなど新たな取り組みに挑戦している。ただこうした取り組みに対して、予算執行のあり方などで事務方との細かいトラブルは絶えないのは、大きな課題である。

学生には学びだけではなく地域に自らのアイデアを還元することを意識づけるため、理実Ⅵでは八潮市長に対しての実習成果報告会を組み入れた。2年生の発表に対し八潮市長大山忍氏からは丁寧なコメントとともに、施策に反映させられるものもあるとの講評をいただいた。学生が自治体の首長に対してプレゼンをする貴重な機会を組み込むことで、学生の意識を高める効果を狙っている。加えて、1年生には市長報告会へ同席することで、次年度に向けた意識づけをおこなった。こうした仕掛けができるのは、大学と自治体が協定を結んでいることが大きい。

最後に

本稿は地域創生学部の地域実習（フィールドワーク）について筆者の事例を中心に紹介した。2025年度には新たに3年生対象の大型地域実習である地域創生実習Ⅰ（4単位）・Ⅱ（8単位）・Ⅲ（8単位）が始まる。実習にかかわる体制もまだ整っていない。課題は山積しているが、学生のためにもより良い実習ができるよう取り組みを進めていく。

一方で、淑徳大学特有の「定員充足」問題にとらわれることなく、必要な投資をおこない新設の地域創生学部を育てていくことをお願いしたい。加えて各教員の持つ専門性を尊重し、それを引き出す組織の力が求められている。「事件は現場で起きている」。現場の教員の声を尊重すること。それが学部の魅力創出、ひいては大学全体の魅力創出につながっていく。地域創生学部から淑徳大学の魅力創生へと発展させていきたい。

<以下、実習の様子。撮影はすべて高木が撮影>



地域理解実習Ⅴ ワークショップの様子



理解実習Ⅴ 菓子道楽杵屋さんでの資源活用に関するヒアリングの様子



地域理解実習Ⅱ 学生によるプレゼン



地域理解実習Ⅲ 徒歩巡検の様子



地域理解実習Ⅳ 工場見学の様子



地域理解実習Ⅳ 農業体験の様子

(地域創生学部地域創生学科 教授 高木亨)

⑥学生とともに成長し、変化しながら拡大する プログラミングスクール「ShukuLab」

永井恵一

経営学部の学修の特徴のひとつがプロジェクト型授業です。今回は東京キャンパスで始まった新しい取り組み「ShukuLab」について、山脇先生からご紹介いただきます。（永井）

学生とともに成長し、変化しながら拡大する プログラミングスクール「ShukuLab」

経営学部では、学生同士の学びを促進するために、2023年度から「ShukuLab」プログラムを開始しました。きっかけは、とある学生から「自分がこれまで大学で学んできたプログラミングの知識を後輩に伝える塾のようなものを作りたい」という相談を受けたことです。そこから、どうすれば実際にプログラミングスクールとして学生の学びの場として機能するようになるのか検討しつつ、伊丹（2006）の「場の論理」に基づいて設計を行い、2023年4月から第1期生の募集を行い、実施しました。

2023年度のプログラムでは、学生メンターが受講生に対してプログラミングを教えることを目的として、基礎的なPCの使い方から始まり、Webサイト制作を通じてHTML、CSS、JavaScriptを学びました。このプロジェクトは、教員ではなく学生が講師役を担うことで、心理的な障壁を取り除き、学びの「場」を形成することを目指しています。

実施は、5月から8月の第1期と10月から2月の第2期に分けて行われ、90分のセッションを15回から18回程度実施しました。受講生は自作サイトを作成し、その成果を最終成果報告会でプレゼンテーションすることで、相互にフィードバックを送り合いました。

2023年度の成果として、ITパスポートなどの資格取得に向けたモチベーションの向上や、自律的に学び続ける学生の増加が挙げられます。また、プログラムを通じて、学生同士のコミュニケーションが生まれ、サークルでもなく、授業でもない、新しいコミュニティの場となりつつあります。このShukuLabをきっかけに新たなサークルが設立されたことも注目すべき成果で、ここで生まれたサークルが2024年度の産学連携プロジェクトの発足にも関係しています。

一方で、依然として「プログラミング」に対する心理的ハードルが存在し、多くの学生が参加をためらう傾向が見られました。そこで、2024年度前期にはLEGOスパイクを用いた新しい取り組みを実施しました。LEGOスパイクは、視覚的なプログラミング教材であり、比較的プログラミング未経験者でも楽しみながら学べる教材です。これを用いてまず基礎知識を習得し、次にハンズオン・ラーニングを通じて実際にプログラミングを体験します。このプロセスにより、参加学生が自信を持って学びを深められるようにします。そして、夏休みには「SHUKUTOKU ロボコン」と称して、総まとめのロボット制作に取り組みました。

2024年度後期には、学生たちの学びたい領域に合わせてWEBデザイン班、ITパスポート班、3Dプリンター班、簿記班の4つのコースを新たに設置しました。学生メンター一人ひとりと面談を行い、「あなたはShukuLabを通じて何を学びたい？」という質問をしながら、彼らの学びたい気持ちを言語化させました。そうして設置した各コースのカリキュラムと運営方針は、全て学生自身が決定しており、これによりプログラムが大きく拡大されました。

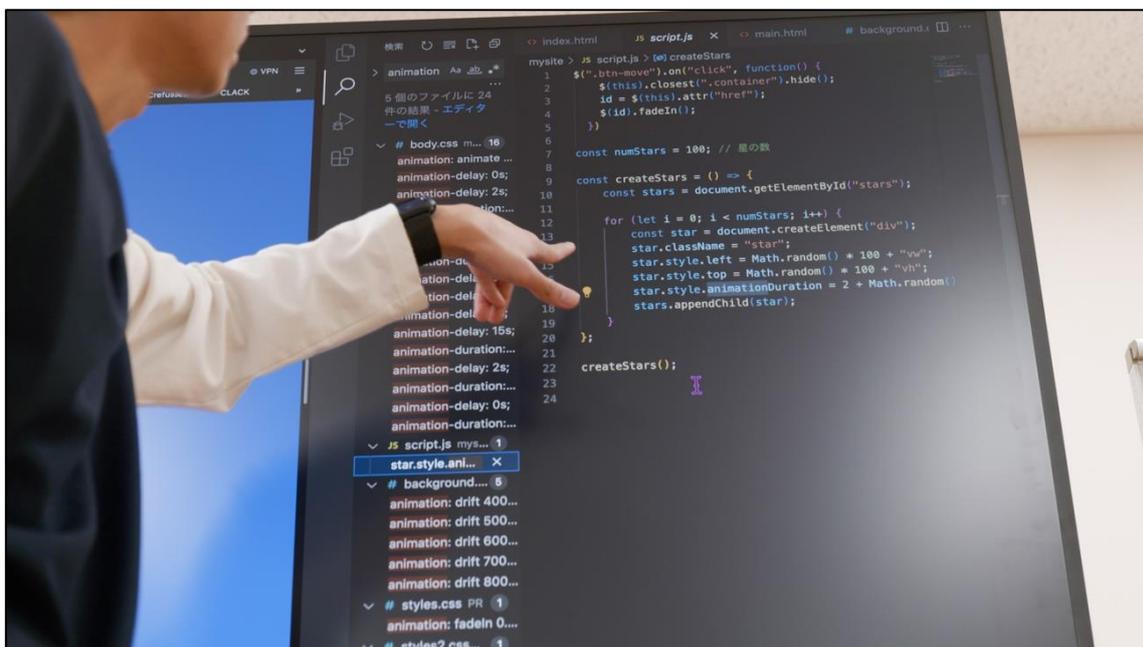
WEBデザイン班では、先輩学生が制作したカリキュラムを使ってHTMLやCSSを学び、最終的には自作サ

イトの制作を目指しています。IT パスポート班では資格取得を目指す勉強会が開催され、黙々と勉強する時間とお互いに問題を出し合う時間のメリハリを意識しながら基礎知識の習得を目標にしています。3Dプリンター班は、最終的なゴールを「自分が作りたいものを作る」と設定して、3Dモデル作成の基礎から学び始めました。簿記班は、経営学部の学生にとって必要不可欠な簿記の基礎知識をしっかりと学ぶことを目的とし、問題演習を中心に進めています。簿記に関してはプログラミングとは直接関係はありませんが、もっと自由に自分の学びたいことを学べる場として、今後さらに拡充するき

かけにしていきたいと思っております。

このように、ShukuLabでは学生の「学びたい」気持ちをサポートする組織作りを進めており、各コースの企画・運営が全て学生自身によって行われることで主体性や問題解決能力が育まれています。時にはピザパーティやクリスマス会などのお楽しみイベントも開催しながら、学生サークルでもない、教員が主導するゼミでもない、学生が主体となりながらも教員がフォローに入る、新しい形のコミュニティとなれるよう、今後も継続的な改善を行っていく所存です。

(経営学部経営学科 准教授 山脇香織、
経営学部観光経営学科 准教授 永井恵一)



高等研センター年報について

淑徳大学高等教育研究開発センターでは、2024年度に「淑徳大学高等教育研究開発センター年報第11号」（最新号）を発刊いたしました。

最新号を含むこれまでで発刊された年報については、本学高等教育研究開発センターHPに掲載されておりますので、是非ご覧ください。なお、今後、学術機関リポジトリデータベース（IRDB）への掲載も順次進めてまいりますので、登載次第お知らせいたします。

淑徳大学

高等教育研究開発センター NEWS LETTER 2024 第3号

発行日：2025年3月24日

編集：淑徳大学高等教育研究開発センター